

日本歌人

第151號

昭和32年1月

前川佐美雄編輯



一九五七年

1

日本歌人社

春日大社献詠祭

- 一、日時 昭和三十三年一月十一日(金)午後二時
 - 一、場所 奈良市春日野町 春日大社々務所
 - 一、作品 一首(雜詠)
 - 一、締切 一月五日
 - 一、送先 奈良市春日野町 春日大社内献詠係宛
 - 一、歌話と選評及び質疑応答(各選者)
 - 一、会費 百円(作品と同時に送附、プリント及び茶菓代)
 - 一、賞品 入選者には記念品と選者の色紙及び朝日新聞社賞NHK賞その他を呈す
 - 一、選者 安部忠三、川田 順、高安国世、平田春一、前川佐美雄、吉井 勇、米田雄郎
 - 一、舞樂管絃の演奏(午後一時春日大社林檎の庭にて)
- 曲目 管絃(越天樂) 舞樂(陪臚 四人舞)
- 備考 一、本献詠祭は爾後毎年恒例祭として一月十一日に行ふ
一、当日の情況はNHKテレビにて放送される。

主催 春日大社
 後援 NHK新聞社

定價 六十圓(送料四圓)

昭和二十九年八月十九日第三種郵便物認可 昭和三十一年一月十五日印刷 昭和三十三年一月二十日發行 毎月一回二十日發行 日本歌人第八卷第一號

日本歌人

1957年
1月 號

第百五十一号 目次

小文 章(二十七).....	前川佐美雄.....三
作 品 I.....	四
神 夢.....	稲垣足穂.....六
作 品 I.....	九
作 品 II.....	三
佐藤春夫.....	田中克己.....六
屋根黒き街(三十五首).....	古川政記.....六
伝統について 現代短歌の諸問題(第五回).....	同 人.....〇
南 天 燭.....	堀内民一.....四
雀 (詩).....	高橋新吉.....五
とりのこされた写真派.....	北久仁雪.....六
日本歌人集 I.....	同 人.....三
平光善久三十五首評.....	同 人.....三
日本歌人集 II.....	同 人.....三
日本歌人集 III.....	同 人.....四
作 品 評(第九回).....	同 人.....六
第二回日本歌人賞.....	同 人.....六
奈良便.....	前川佐美雄.....八
編輯後記.....	五

短歌は進歩する

昭和三十三年の正月を迎えた。戦後十二年目の正月といふわけだが、国民生活もだんだんよくなり、国力も大いに恢復し、国際的にも信用が増し、既に戦後ではなくなつたのだ。などと演説するつもりは少しもない。それよりは戦後十二年目の正月を迎えた、わが歌壇をこそ私はやはり最もめでたしとするものである。

思へば様々の悪口を言はれた歌ではあつた。あれほどまでに言はなくてもよかりさうだと思はれるやうなものもずるぶんあつたが、それも戦後の流行であつた。それはともかく皆んな勉強し努力した甲斐があつて、今ではすつかり立ち直つたやうである。むしろ戦前にもまして歌はいよいよ盛んであり、その質もまた大変な進歩を遂げたものと私は信じてゐる。

このことは何も私の独断ではない。事実がそれを証明するが、しかし戦後のものなら、それがどのやうにすぐれたよいものであつても決して賛成しない人がある。すぐに目にかどを立ててその悪口を言ひ、かたがた戦前に就着するのである。もちろんこのやうな気持はよく分るし、戦前派であるなら多少は誰にもあると思ふが、それにこたはりすぎると自身の進歩を妨げるだけでなく、何よりも考へ方が暗くなり、時に卑屈にさへもなりがちである。虚心坦懐によいものはよいとする思量が望ましい。それと同時に皆んなもう少し自信を持つやうにしたらよい。外部からの悪口雑言に馴れつこになり、不知不識のうちにくばくかの劣等感みたいなものを持つてゐる。これが一番困るのである。

さういふ思ひをひそめてゐては決してよい歌は出来なだらう。自信を回復し、すべてのものに対等の意識を持つて行爲すべきである。戦後の歌人の戦前に及ばないのは、ただこの一事だけであると思つてゐる。

これらのことを歌人は皆んなよく考へなければいけない。さうして、たとへば綜合雑誌などの編輯の仕方も次第に改めるべきである。歌をよくするのも、歌壇を盛んにするのも、歌人自身とするのでなくては誰も手を貸してはくれないのだ。年頭に當つて言はずもがなの小言を述べ

る。(小文章二十七)

神の夢

——私は世界の果からネクタイを取替えに来た——

稲垣足穂

ドイツの理論物理学者パスカル・ヨルダンの「二十世紀の物理学」という本の終章に、苦悶の哲人ミゲル・ド・ウナムノの言葉が引いてある。宇宙とは神の夢である。神は百億年のあいだ眠り続けてきて、われわれはその神の夢の世界に住んでいる。そして彼の夢みることが止まないように、われわれは祈禱や祕儀をもつて、彼をいつそう深い眠りに誘わうとしているのであるまいか」

僕には測らずもロード・ダンセイニの作中で読んだことが思い合わされた。それは、大神マアナ・ユウドスウシャイが眠りに就いた時、八百万の神々が彼の枕辺に集つて、それ／＼に太鼓を打ち出したというのである。大太鼓もあれば小太鼓もあり、形は様々で、各自は此処を先途とバチを打ち続けている。何故なら、いつた大神が目目を醒すようなことがあると、何も彼もおしまいだからである。太鼓を叩いている神々自身も消えてしまわねばならない。こうして太鼓の音と共に時間が続き万物が流転して行く……

ダンセイニの作品、殊に捉え所のないような、世界のふち(エッジ)に於ける数々の冒険を叙した小品群に就いて、曾てイエーツが評した。「こういう作の妙味は何と云つたらよいだろう。その或物は、友人の宅の床に敷いてあつたベルシヤ絨氈の模様を想わせるし、或も

偉大だつたのだ」——又、次のようなのを僕は憶えている。——或日、わたしは騒がしい街を離れて、波止場への道を探つた。褐色と青い粘土が斜面になつて海へ迂り落ちていく所に、一人の巨きな、色の黒い男が、沖を見て佇んでいた。彼の頭髪は無数の輪形に縮れ、両耳には大きな金の耳環を嵌めていたが、腕を組んだまゝ身じろぎもしないで水平線を見詰めている。その両眼は、遠くの緑色の海洋の波のうねりと共に揺めき、云い得ぬ悲しみにとぎされているようだった。余りに異様なので、わたしは彼に向つて問い掛けずに居られなかつた。「君はあの船に乗っているのかね」港の向うに泊つている白い汽船をわたしは指した。彼は首を横に振つた。「ではこちらの灰色の船かね」それにもよこに首が振られた。わたしは、知つている限りのラインの名を次々に挙げて訊ねてみた。彼はどれも頷かなかつた。そしておしまいにこう云つた。「俺ほどの航路にも属さない。俺は昔の海賊のたつた一人の生残りだ。俺は……スペインの海で余りに因業を働いたので、おれは死ぬことも許されていないのだ」

津の国の難波の春は夢なれや声の枯葉に風渡るなり
この古歌が何故か僕に、「新世界」にルナパークが出来た頃、その片隅にあつた「不思議館」のことを呼び起させる。

不思議館のようなものは、一時、千日前にもあつたようだ。燈に照らされた室内の情景が硝子戸に映つて、庭先の青い夕景と二重になつているのをよく見ることがある。あの理屈を利用して、大きな硝子板を斜め上向きに舞台に嵌めて、硝子の向う側にあるものと観客席上方の隠れ場所から硝子面に反映しているものと、この両者を互いに入れ

のは古いアイルランドの短艫の柄に見る宝石細工の様だし、或るものは夕映の雲の宮殿を連想させる。云わば数日かの深い睡りの中で霊の国の旅路に見て、其後忘れてしまい、頻りに思い出そうと焦つている時に、ふとそれを見せつけられた……そんな気持ちに誘うものばかりだ」

序に、それは又、わけがありそうなエメラルドカルビーカを嵌込んだネクタイピンのようだと言は云いたい。——神々の都を見ようではないか、と云つて出発する語があつた。夜もすがら砂は立上り舞い乱れ、多くのことを囁いたが、それは人間には判らぬ言葉である。やがて風は死に、砂も又寝た。こんな沙漠の数十夜を経て、憧れのサアダスリオンに来てみると、既に遅く、白い大理石の都は時の流れの中に消滅し、砂の上には一人の男が坐つてしく／＼と泣いていた。——「時間」がスフィンクスを誘惑しようと思つて、頻りに秋波を送つているが、微かな紅を顔面にとどめたスフィンクスは、一向「時間」に構わうとせず、相変わらず沙漠の黄金色の「砂」を相手に戯れていた。

——地球が燃殻になつてしまい、星の世界から一角獣たちが廢墟見物にやつてきた。焼け残りの大きな石造寺院を見て、彼らは互いに肩を叩いて、感心した。「見ろ、やつぱりこの世界の住民らにも夢が一等

替えてみせる見世物である。何しろ、石膏像が生きた美人に変わり、それが更に花束に化したり、又、風景がそのまま全く違つた景色に変わるのだから、最初はびつくりした。——ちやうどあんな具合に、大阪も何時しか「溶」暗して、昔の芦原になつてしまふのであるまいか、何事も広大な淀川デルタの芦の葉の、風にそよぐ間の夢になり終るのでないのだろうか？ 梁夫人の前に此話を持出したら、「それは水爆のことですか」と問い返されたが、別に戦争とは限らない。先のダンセイニが書いている。ロンドンに赤い薇薔が咲く小道が一つ残つていることを、自分は知つている。それは古いこの土地の唯一の名残りののである。あゝあんな懐しい小径が再び増えて、そして遠い／＼昔に漂泊の旅へ出て行つた人々が帰つて来て、夜の焚火を取囲んで古い唄をうたうのがどんなに願わしいことか！ 何故ならわれわれはあの黒づんだ大都など殆んど愛してはいなかつたのだから——と。

例の「空飛ぶ円盤」に就いて、西洋では、それは星の世界からわれわれに警告にやつてくる虚空船だ、ということ唱えている人がある。そしてそんな飛行機と搭乗者が空間を飛んでいるあいだは、何も物質的機械だとは云えず、肉体的人間だとも決められないというような説明をしている。トランス・フィギュレーション(非物質化)とマテリアリゼーション(物質化)の理論については、此処で紹介する余裕は無いが、「空飛ぶ円盤」を目撃したのみか、その乗員と親しく言葉を交えたという人が、アメリカに数十名、其他、加奈太、南米、濠州、イタリヤ、フランス、スウェーデン、アフリカ、ニュージールランドにかけて多数あり、星界人が口をそろえて云う所として伝えて曰く、「地球上の人類は数千年の昔、我々星人と同程度の文化を持つていたが、タイタン族とアトラン族との戦争の結果、原爆を用いて互いに殺し合

つた。為に地球人の九十九%は滅亡してしまつた。それと同時に、言語に絶した大地震が起つてレムリヤ大陸とアトランティス大陸とが海中に陥没してしまつたのである。」

こうして人類生活は再び未開時代に戻つて、獸に近い状態からスタートを切つたと云うのであるが、この説はいわゆるオックスルト・サイエントリスト、即ち Rosi-encian, Theosophy, Triangle, Astra, 等の

諸神祕主義団体の史學で云う所と期せずして一致する。僕の住いから宇治川を少し溯つた六石山に、先日山くずれがあり、修復中に、百メートルの頂上から川床の石が発見された。これによつて宇治川は以前、「井手の玉水」方面へ南流していたという推定が証と立てられた。それはどれくらい昔かと云うと、約二十万年前たどらる。これでは、平等院前身の源融の別行や菟道離宮があつた頃どころの話でない。然し「二十万年」も、先の神祕學派の説く所とは比較に

奈良 便

前川 佐美雄

○十一月の中旬ちよつと上京した。晩秋の快晴の日で富士もよく見えた。古川政記君の幹旋で日本歌人東京歌会による私達の勸迎会があり、三十数人が集つた。新しい人も加はつてゐてこの前よりは面白かつた。この会が盛んになり、元氣づくことを私は切望する。

○この会と前後して椿山荘での平田春一君の歌集記念会と、日本橋クラブでの鈴鹿俊子夫人の歌集記念会に出て大勢の人にあつた。平田君の会は芳賀禮氏が司会したが、浪漫派の

浅野晃、中谷孝雄、大鹿卓、伊藤佐喜雄、五味康裕、それに今度野間賞を貰つた外村繁氏らに会つた。他に二十数人若い作家や詩人が来てゐて五味君を胴上げしてゐたが、私はこの人々からおだてられて「新しい文学よ興れ」などと景氣づけの演説をぶつたりした。

甚一君らと一緒にその学生時代よく本郷の私の下宿へ遊びに来たものである。東京会館で石川君と三人話しながら、つい懐旧談に花が咲くのも二十余年ぶりの故だらう。そのころやはり同じ年下の友人では石河穰治君も矢崎弾君も、それから長岡輝子さんとテアトルコメデーをやつてゐた金杉博子君もみなよき玉を抱きながら天死にしたが、穰治君の相棒だつた十返肇君だけが目下甚だ盛んである。とまあそんなことを思ひ出すのも、バルザックなどいふ葡萄酒を飲まされたからである。人の世みなこれ悲喜劇か。

作 品

前川 佐美雄

あかときき黄色き空を群がりてつぐみ西北にわたるそのころ
うらがれの苑の芝生はひろけれど参道を行く元日なれば
万葉の植物園の枯れ芝に落ちて黄にはふ去年のくわりんは
参道をそれ来て黄なる枯れ芝生ひかる金あみの鶴に近づくと
元日の朝日をあびてまぶしかり樹も家もゆがむガラス窓の外

安部 忠三

十二月某日朝日講堂にて懇話会主催の歌会ありて
数おほき歌を見あきてガラス窓にひらく冬ぞらの虚しき晴天
冬の晴れし青天は大阪の街のうへとぶ鳥もなくて年暮れむとす
年尽きて来らむ年になさむこと統一のいとまなく日が過ぎてゆく
妻子らと住まはむ家もきまらぬまま日の過ぎゆくが映画のごとく
いきはひてことを運ばむとするわれに立ちはだかりておこる事多し

横田 利平

人間が溶けつつ影のみ残したるしろき石段に秋風折れ曲る
薄伴の子らにやさしきケロイドの乙女の片目何にきびしき
誰に對けらるべき怒りかこれは泥田なか同胞傷つけ合ふ日昏るるまで

富田 敦夫

II

十月の澄んだ空気に窓開けた朝の食卓すでにととのふ
いちちやく白いブラウス着け終るその胸反らし駆け出して行く
向き合つた双の眸に濡れてくる年齢の目の避けられぬ位置
また早い山の紅葉のそのうへのよく澄む空を切つて啼く鳥
枝先を刈り込んである庭の木が伸ばす新芽の輪郭の秋

井上 彰

首細き少年の肩に来てとまる偏愛されし尾長鳥の仔
自転車鍵失くして運ぶ一丁日に焼けて少女ら山より帰る街に
霊柩車に会ひたることを善しとして苦しき今日の散歩を終る

平光 善久

傲慢と稚気の遊戯を繰返す三途川原のシジフオス童子
奪衣婆にしらみ取らせてぎらぎらの眼のみ光らす少年死刑囚
祭壇にぬかづかぬ若き一群の暗き賞でつつ脇士羅漢ら
埃かぶつた雑草原に秋陽射し秋陽はそこで殉教者ぶり
点字器に写す思想は陰画に似て透明無垢に善意を刻む

石橋 幸増

空の向ふが透いて見えさうな一刷毛のこの薄雲のゆゑに翳れる
己の体臭に嫌悪し顔を背けれど漆黒に光りて視線をはじく

春夫先生のこゝろ

田中克己

学校生活十六年、そのあとの方とかさなる文学青年生活三十年の間に、先生と呼ぶ人は多かつたが、今だにその前に出ると不勉強がてはくて身のちぢまる思ひのする先生が二人をられる。一人は東大で東洋史を教はつた和田清博士、もう一人は佐藤春夫先生である。

春夫先生を師とたのむやうになつたのはいつからか、だいぶ記憶力がうすれて、はつきりはしないが、保田與重郎君にすゝめられて読んだ芥川龍之介全集よりあとのことで、高校の後期であらう。はじめて読んだのも何であつたかおぼえてゐないが、第一書房から出た春夫詩集は再三よんで暗誦するほどになつてゐた。「秋刀魚の歌」は少年にはわからず、「水辺月夜の歌」の「げにいやしかるわれながら、うれひは清し、君ゆゑに」の箇所や、「断章」の「さまよひくれば秋ぐさの、一つのこりて咲きにけり、おもかけ見えてなつかしく、手折ればくるし、花ちりぬ」の章句などは、口ずさんで人にもきかせたおぼえがある。

大学に入學したのは昭和六年、この年、先生は私のいま一番愛誦してゐる「魔女」といふ詩集を出された。赤いガラスの入つた表紙を私にハハ族の心臓で私は先生のお邸を訪ねた。昭和九年の春のことであつた。ベルを押すとしばらくして、女中さんがあらはれた。名刺を出してお会ひしたい旨申し上げると、しばらくして女中さんはまたかへつて来て、「たゞいまお仕事ですが、お会ひになりたい御用件は？」としかにかういふ御返事だつたとおもふ。御用件？全くないのである。私は冷汗をかくと同時に「御多忙中とは存じませんでした、いづれまた」といつて、早々に逃げ出した。この時女中さんのせ中に寝てゐた赤ちゃん、いまではもう成人である。

勝手な話だが、私としては春夫先生を師と仰いでゐる証拠は山ほどある。広汎な東洋史学の中で台湾史を卒業論文の題目としたのは、全く「女誠扇綺譚」と「南方紀行」二冊のせりである。忘れもしない昭和八年のこゝろと台湾まで出かけて行つて、先生の小説の生れたと信じてゐる日月潭のはとりの、カン碧楼といふ宿に着いたとき、「佐藤春夫といふ小説家を知つてゐるか」と、宿の女中にたづね、「さあ、わたしのごころの小説はよみませんか」といふ答に、まんざらでもない顔をしてゐたこの女中の顔を見るのもいやになつた。安平にゆき、排日でわたれないアモイの方をながめ、先生とおなじく行つたつもりになつて、作つた詩は私の第二詩集にある。

昭和十三年に大阪の中学の教師をやめて、再上京して出した「詩集西康省」の出版記念会には、岡本かの子、宇野浩二などの諸先生に先立つて先生は会場までお越しいただいた。開会がおくられて手持ちぶさたな時間を、先生がおいでだといふばかりに私はまた冷汗のかき通しであつた。先生のこの詩集へのおこは何だつたか、おかげで一向おぼえてゐない。

さて私が先生の弟子たることを確認したのは、昭和十七年大東亜戦

はよろこび、詩の内容はあくの自分にはよくわからないながらも、女性をこほく愛すべきものと教へられた。昔の大学生のなんと幼かつたことよ（参照石原慎太郎「太陽の季節」その他）。

それでも親もとをなれたありがたさは、毎月送つて来る学資の中から、一〇円を割いて同人雑誌を出す余裕さへあつた。昭和七年二月創刊のこの雑誌は堂々数十頁、題も「コギト」と保田によつて命名された。そしてその第二号に、私は詩のほかは評論を執筆した。もとより詩が文学のジャンルの中で、最も損なものであるといふことは知らなかつたが、実は私はもともと議論好き、評論家になるつもりがあつたのである。その題は「佐藤春夫小論」とし、尊敬措くあたはざる大家をまづ処女作の目標としたのである。しかし何たる失敗、私の筆は「田園の憂鬱」「都会の憂鬱」など愛誦おく能はざる先生の代表作にはふれず、ちやうど巷に出はじめた長篇「武蔵野少女」のことを論じ、しかもこの作のいいところ——私は今もこの小説はきらびでない——を述べないで、文中、先生がマルクス主義心酔のあまり實際行動に入つてゆく純粹なそれゆゑ幼稚な少年を、同情的にやゆしておいでの箇所をとらへて、「先生は不惑の年をこえたとなんに老いられた」と論じたのである。マルクス主義でないから老いても変なものが、当時、私どもは革命近きと信じ、資本主義の倒れる日が、私自身が不惑の齡を越えて、五十に近くなるまで、まだ来ないなぞ、ゆめにも知らず、これにちよつとも批判的な眼をする人を老人よばはりしたのである。

春夫先生がこんなちやちなものをおよみになつたとは思はないながらも、自ら気がひけて、先生をお訪ねすることはない中に、大学卒業の年が来た。大阪へ帰るとなれば、一度だけはお顔を拜見したい。

争開始のまもなく、徴用となつて大阪で船を待つまのことだつた。先生は私の出発の挨拶に答へて「ますらをのうたびとなれば心して君死にたまふことなかれかし」のお歌を賜はつた。私はこの歌の書かれた、先生のハガキを抱いて南方にゆき死ぬかと思ふにも会つたが、死なないうで帰つて来た。そのあとがいけない。私はお札にもゆかず、お札の手紙すら差し上げなかつた。なんたる失礼か。ありがたいと存じ上げてゐることは、いつかわかつてもらへると子供のやうな考へなのである。しかし実際はお訪ねしても先生の前へ出ると口ごもりろくなこともいへなかつたと思ふ。先生があつて南方へゆかれるときいて、また関口町のお宅へ伺ひながら、またお忙しい御様子に、「お氣をつけてお出でを」と玄関先で申し上げたまふ、帰つて来た自分である。

自分の世界の大部分が春夫先生に負うてゐることは折にふれわれとおどろく。中国文学も春夫先生に負うてゐる。このごろ贈られた竹内好の「魯迅入門」で岩波文庫の「阿Q小伝」の訳は増田涉さんではなく先生の訳だと知つた。これを沢山の作品の中から選び出されたとしたら、何たるかんのよき、また訳のよき。私には今だにおどろくことばかりである。

訳などは余業、本職の小説はと問はれば、三十年枕頭からはなさないのは「F・O・U」だと答へよう。感傷のないひ方をすれば、私は死んだ子の骨とともに、谷中安規装面の版画荘版のこの本を、私の墓に埋めてもらひたいと念じてゐるのである。

私の先生に負ふところは、書いてゐる中に重荷たといふことがわかつた。物いひにも春夫的なところがあると、友だちがいふ。先生に対して眼をそらさないで物がいへるやうになつたら、また一度お訪ねしたく思ふ。それが出来ないもので、愈々東京がなつかしくてたまらない。

羽搏く真似をしてみる 藤田 歌蓮

(山村) 空の路をゆく首鵝のおぼつかなきを身に覚え私も一寸目をつぶつてみました。

古い母の悲しみ多く白骨のうつくしき見ゆ我は子ゆゑに 田垣 晴子

(山村) 洗練された感覚から生れた白骨の美しさに引かれました。

膝の上に落ちたパン屑生きる事は疲れる丈でしかないと思ふ 阿曾 邦雄

(山村) 荒削りですが、パン屑を見つめる目の歌以前の作者の気持に同感します。

鳥なべて羽をたたためる白昼野をすすみしことのふかき悲しみ 北久仁 雪

(山村) 作者の心の支へとなつてゐるものを見たと思ひますが、すすみしは問題でせう。

ひろびろと何にし遇はむ白屋のかはらの石に脛をかわかし 北久仁 雪

(平光) 茫漠としてとりとめないやうでありながら、掴まれてゐるものは人間の第一義的な問題である。無目的の行為に似て目的以上の意味をもつ無為の姿勢。それは精神の運動の具象化でもある。ここで脛をかわかしてゐるのは、神か魔のいづれかであらう。隠されてゐる陰謀にメスを入れる必要はもはやなからう。この無為の姿勢、まことに大公望の風

態にも似て、すさまじい間抜け方だ。

星座わたれば一つの星と共に墜つわれの素足は汚れてゐしか 岡 せい子

(平光) 素足の汚れは、だが肉体のうちでは一番美しい個所ではないか。すなはち、この汚れ、人間のかなしみに似る。星と共に墜ちゆく先も、つひに天界であることを作者は知つてゐるに違ひない。ここに展開されてゐるロマンのおほらかさと、内観の姿勢の正確な把握をとる。

胸の上に手をおいて寝る吸ふ時にふくれる胸を意識しながら 阿曾 邦雄

(富田) 誰でも経験することがごく素直に現はされてゐる。しかも、明日への希望にふくらんだ明るさも。こころよいリズムに載つてゐる巧まざる若さに注目しよう。

何ものも透らぬ暗き沢にきて折れたる枝などうかべてゐたり 北久仁 雪

(富田) 「何ものも」は強調であるが、充分利いてはゐない。しかし狙ひには同感する。沢の両側にあるは崖か樹林か、それを洩れてくる空の間接光を受けて、良く澄んだ空気、水に浮べた折れた枝の重さが感じられる。

母に寄りて本読める子よ父に似し額をもてばわが願ひ湧く 岡 せい子

「魚道」も各作者の作品が満足しうるまでによくなつて来たので、新装をこらして三月中には出版する。また山中智恵子氏の歌集「空閑格子」も二、三月中には出版になる運びである。次号に詳報する。

☆三十四頁記載の如く第二回日本歌人賞受賞者は横田利平、田垣晴子の二氏が決定した。授賞は一月十五日大阪浪速荘での新年会に於いてなされる。別項予告の新年会にはこの受賞を祝して賑かに参集されるやう希望する。☆裏表紙広告の通り春日大社献詠祭は一月十一日である。すすんで協賛せられるやう希望する。

恒例の日本歌人新年会は次の如く開催、第二回日本歌人賞の授賞の儀も行ひますから繰り合はせ出席下さりたく、時間勵行を願ひます。なほ出欠の如何にかかはらず一月十日までに発行所宛御通知願ひます。(係り)

一、日時 一月十五日(成人の日)午後二時

一、会場 浪速荘(大阪市上本町六丁目近鉄本社南側。近鉄より約二丁)

一、次第 新春の挨拶。第二回日本歌人賞授賞。記念講演。晩餐会。懇親会。

一、会費 六百円(晩餐会費その他)

当日幹事 阿曾邦雄、奥 晴子

これを以て御通知にかへます。改めて案内は差上げませんから御承知下さい。

(富田) 「母」と「父」が「われ」と「夫」から切り離されてゐる。そんな歌ひ方がこの歌をかへつて切実にする。「額」も良い。生活に裏付けられた良い歌と思ふ。

足を空に四谷の駅を昇降す日はさらに赤き入日となりて 宮崎 智恵

(前川) この歌を読んでほつとした。足だけ駅の階段を昇降しようとしている。「日はさらに赤き入日となりて」とつづいてゐるけれど目は何も見ていない。心は結晶して動かない。「足を空に」などと再び言える言葉でない。再び作れない歌は一瞬に出来るものであらう。

氷雪のとけゆく心理にわれのゐる涙のごとく 藤田 歌蓮

(前川) 「われのゐる」と言わなければならぬのだが、「涙のごとくぬ幼子のごと」は、それでよいのであるけれど、不安心である。くり返し歌わねばならないものが残つてゐる。生活の歌であるためだろう。

云はねども温め合はむたまさを連れ立ちて飼るわんわん物語 莊 雪子

(前川) 作者の笑を感じるけれど笑えない。

日本歌人は前川佐美雄が主宰する。日本歌人は会員と同人と維持同人とから成り、会員は一ヶ月八十円、(誌代六十円を含む)同人は一ヶ月二百円、それぞれ六ヶ月以上を前納するものとする。維持同人は内規による。学生及び療養者は一ヶ月五十四円の割合とする。

投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十七字以内で楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。添削は十首まで二百円。但し返信用切手封皮同封のこと。

問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十円送料四十八円、発売所(京都市下京区仏光寺御幸町西入有限会社社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)発行所では取り次ぎはしない。

日本歌人 (毎月一回二十日発行) 定価六十円・送料四円

昭和三十三年一月十五日印刷 昭和三十三年一月二十日発行

編集印刷兼 奈良市坊屋敷町四一 前川 佐美雄

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

賀 春

昭和三十三年一月一日

編輯 後 記

☆昭和三十三年の年頭に当り、会員同人維持同人及び顧問客員その他本誌に好意を持たれるあらゆる人々に慶祝の御挨拶を申し上げます。

同時にそれらの人々をふくめて日本人全体が幸福であるやうにと祈り上げる。伝へられるハンガリヤのやうな悲惨事は、一刻も早くこの地球上からなくなつて欲しいと思ふ。われわれは権力や武器とは関係がない、また所謂平和論者の平和とも関係のない真の平和を望んでゐる。歌を作ることによつて少しでもそれに近づき、心の幸福がえられるならこれにまさるよろこびはない。今年も去年にもまして更によい年であるやうにと祈られる。

☆さて前号奈良便に書かれてゐた本誌百五十号を記念する合同歌集は全会員の参加を希望する。二日末には刊行の予定だから、最近一、二年間の作品の中から自選して頂きたい。

☆これにつづいて懸案久しい新人十五人集

態にも似て、すさまじい間抜け方だ。

星座わたれば一つの星と共に墜つわれの素足は汚れてゐしか 岡 せい子

(平光) 素足の汚れは、だが肉体のうちでは一番美しい個所ではないか。すなはち、この汚れ、人間のかなしみに似る。星と共に墜ちゆく先も、つひに天界であることを作者は知つてゐるに違ひない。ここに展開されてゐるロマンのおほらかさと、内観の姿勢の正確な把握をとる。

胸の上に手をおいて寝る吸ふ時にふくれる胸を意識しながら 阿曾 邦雄

(富田) 誰でも経験することがごく素直に現はされてゐる。しかも、明日への希望にふくらんだ明るさも。こころよいリズムに載つてゐる巧まざる若さに注目しよう。

何ものも透らぬ暗き沢にきて折れたる枝などうかべてゐたり 北久仁 雪

(富田) 「何ものも」は強調であるが、充分利いてはゐない。しかし狙ひには同感する。沢の両側にあるは崖か樹林か、それを洩れてくる空の間接光を受けて、良く澄んだ空気、水に浮べた折れた枝の重さが感じられる。

規 約 抄

日本歌人は前川佐美雄が主宰する。日本歌人は会員と同人と維持同人とから成り、会員は一ヶ月八十円、(誌代六十円を含む)同人は一ヶ月二百円、それぞれ六ヶ月以上を前納するものとする。維持同人は内規による。学生及び療養者は一ヶ月五十四円の割合とする。

投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十七字以内で楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。添削は十首まで二百円。但し返信用切手封皮同封のこと。

問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十円送料四十八円、発売所(京都市下京区仏光寺御幸町西入有限会社社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)発行所では取り次ぎはしない。

日本歌人 (毎月一回二十日発行) 定価六十円・送料四円

昭和三十三年一月十五日印刷 昭和三十三年一月二十日発行

編集印刷兼 奈良市坊屋敷町四一 前川 佐美雄

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

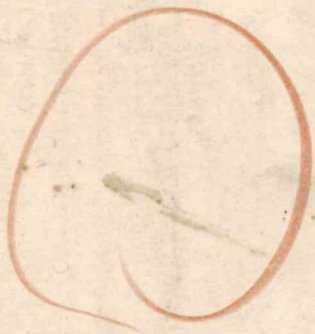
発行所 奈良市坊屋敷町四一 日本歌人発行所 振替大阪四七二八七番

日本歌人

第152号

昭和32年2月

前川佐美雄編輯



一九五七年

2

日本歌人社

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可 昭和三十一年二月二十五日印刷 昭和三十一年二月二十日發行(毎月一回二十日發行)日本歌人第八卷第二號

昭和三十一年二月二十五日印刷 昭和三十一年二月二十日發行(毎月一回二十日發行)日本歌人第八卷第二號

定價 六十圓(送料四圓)

日本歌人新十五人集 歌集 魚道

栗津大堀山永石桑高	祐伴堀口沢長原政富	送道五郎徳源正太郎貴子
原野田菊花東吉	留野田菊花東吉	治幸子たかし診省真津

4月刊行

待望久しき歌集魚道。やうやく作品を描へて刊行するに至る。一人八十首づつ。日本歌人中堅作家は何を志向してゐるか。それは歌壇の驚異であらう。

日本歌人合同歌集

百五十号記念出版 三月刊行

編輯 前川佐美雄
装幀 棟方志功

B6判二百余頁
価三五〇円 送四〇円

前川佐美雄、石川信夫、斎藤史らをはじめ日本歌人全会員の最近珠玉作品約三千首より成る。新しい短歌の源泉と見られ、常に問題を孕みつつ歌壇の先頭を行く日本歌人の作風とは如何なるものか。真にその事実を知らんとする人は本書に就いて見る他はない。

山中智恵子著 歌集 空間格子

序文 前川佐美雄

B6判・150頁
定価・270円
送料・32円

作者は日本歌人女流歌人中屈指の詩人。その鋭い感覚と豊かな抒情。そしてそれを処理する高度の知性。現時如何なる詩歌と対比するも、いささかも遜色を見ない。むしろ作者が何故に短歌の形式を操作しなければならなかつたかの必然性とその運命に驚嘆するだらう。

— 3 月刊行 —

見原文月全歌集

見原文月君が死去されてから三年経つた。歌集「雲泥」を含む全歌集の刊行が企画されながら、様々の障害があつて今日に立ち到つたが、種未亡人の努力によつて愈々近く刊行される。

中村耕三全歌集

中村耕三君は見原君につづいて死去されてもはや三年目である。見原君の歌集よりは先に刊行出来ないといふ事情から遅れてゐたが、これも相ついで刊行される予定。

日本歌人

1957年
2月號

第一百五十二号 目次

小文 章(二十八)	前川佐美雄	三
作 品 I		四
さまざまの美(一)	寺尾 勇	六
次元について	北久仁 雪	八
作 品 II		一〇
作 品 III		一四
伊東静雄の詩	田中克己	一八
冬日に立つ(三十五首)	金子千鶴	三〇
象徴について 現代短歌の諸問題(第六回)	横田利平他	三三
日本歌人集 I	轟 太市他	三七
野村幸子三十五首評		三九
日本歌人集 II		三九
日本歌人集 III		四一
作 品 評(第十回)	堀内 薫他	四三
奈良便	前川佐美雄	四六
消息		四八
編輯後記		四九
カ ッ ト	棟方志功	

完成と未完成

正月早々風邪をひいた。平素風邪だけはひかないから年末ごろ家族が次々にひいた時にも、今度だつて滅多にひくものかと自慢してゐた途端にひいた。大事をとつてをればよかつたものを、無理をしたのがいけなかつた。春日大社献詠祭のあとが本格的といふわけである。

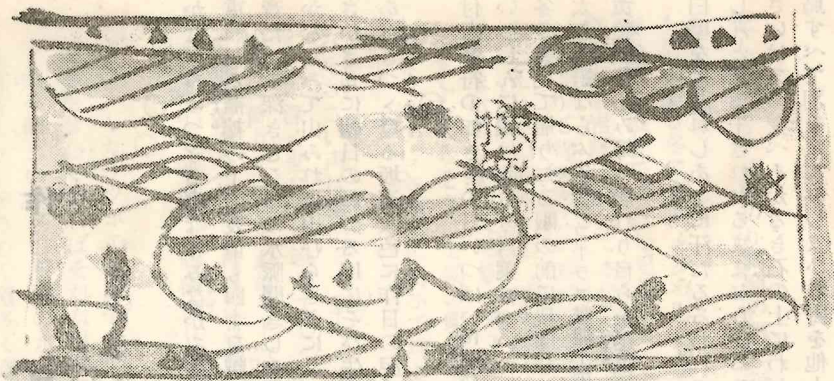
その日は関西いつたが深い霧雨が降つてゐた。大阪へ遊説に来た石橋首相も視界がきかず、いつまでもぐるぐると大阪の上空を旋回してゐた。ラジオはそんなことを報じてゐたが、春日の森ではみぞれを交へた氷雨が一日しとしと降りつづけてゐた。私はしばしば悪寒さへした。

歌会がすみ、座談会となつた時、オブザーバーとして出席の山口誓子の話は面白かつた。誓子の言ふのを聞くと、短歌は斎藤茂吉で完成したが、戦後はそれをこわしてゐるやうに見える。短歌より歴史の浅い俳句は、目下大きく完成しようとしてゐる。とまあそんなやうな話の骨子であつたが聞いてゐる方の印象から言へば、短歌はもう老衰して将来性の乏しい文学であり、反対に俳句は若々しい力を持つ、より将来性のある現代文学だ。といふやうに受け取れた。

そこで私は、それは誓子だけの考へ方で、斎藤茂吉が好きで茂吉を権威と考へる誓子の立場からすればそれも首肯出来ないことはないが、短歌は万葉で一度完成し、新古今で二度目か又は三度目の完成をしてゐる。現代の短歌は斎藤茂吉よりはむしろ島木赤彦で完成してゐると思ふ。と言つてそのことを説明しようとしてゐる矢先に、誰かが横から前川佐美雄がこわす方の張本人だと言つたりしたので、話が妙なことになる。私はこわすことについての説明をしなければならなかつた。

しかし私は斎藤茂吉の歌から完成を感じない。却つて大きい未完成をさへ感じる。それよりはやはり島木赤彦である。これくらゐがつちりした完成の姿は比類なく、古今無双でさへある。私はこの赤彦に反駁し、それをこわし、それを乗り越えない限り、現代短歌の生きる道はないのだと考へた。二十余年前からであるが、もちろん私としても私は私なりに完成を目ざして悪戦苦闘してゐるものである。

それはそれとして、誓子が短歌と頻りに競争しようとする気持、短歌よりは俳句の方が立ち勝つてゐると言ひたいらしい気持、それが語気語勢に屢々感じられて、甚だすがすがしいものを感じた。それにしても誓子が老年の文学を言ふのはいかげなものである。老年を言ふのはまだ少し早い。さういふことは誓子は言はない方がよいのである。(小文章二十八)



巻頭言

伊東静雄の詩

田中克己

早いもので伊東が死んでから四年に近くなる。世人は忘れたかも知れないが、日本文学史は忘れないで、昭和の詩人としては、もう必ず彼の名をあげるやうになつて来てゐる。桑原武夫氏と富士正晴君共編の創元文庫「伊東静雄詩集」(昭和二十八年刊)がこの詩人の業績を見るのには便利で本として出てゐる。しかし小高根二郎君の「伊東静雄」が刊行になれば、もつこの詩人の業績は深く理解されると思ふ。同君はまた「書簡から見た伊東静雄」といふのを、われわれの雑誌「果樹園」にうまずたゆまず書いてゐる。今のままならいつ書き了るかわからないほど、沢山の資料がある由である。伊東もよい祖述者をもつたものと、他人事ながら感嘆せざるを得ない。

その間わたしは古人の歌「われを知る人は君のみ君を知る人も多くはあらしとぞ思ふ」ではないが、安心して伊東のことを述べないで来た。しかしこの三年ほど伊東のことは、忘れるひまもなかつた。伊東の愛嬢マア子君が、わたしの学生だつたこともその理由の一つである。正月、ちよつとひまになつて考へることは、少年の昔とちがつて、未來よりも過去の方が多し。年のせると笑はないで、伊東のこと

を語らしてもらはう。

歴史の浅い日本詩の伝統の中で、たしかに伊東は一二をあらそふ巧みな詩人だと思ふ。用語の適確さは、京都大学で国文を学んだ人によさはしいが、それよりもそのポエジーのたぐひ稀れなものであること——憂愁、悲哀、慷慨、不安——これら一聯の色彩をもつた作品、しかもその色彩の濃さ。いつたいこの色彩を何色と表現すべきか、わたしにはわからないが、立原道造が色彩をもたなかつたのとは、好個の反象をなしてゐると思ふ。そして神代以来の楽天国民にとつて、この色彩はある程度、伊東の詩を近づきがたからしめた。伊東みづからもそれをみとめて、「すくない理解者」との意味の語「少き友」をその処女詩集の献辞にしている。しかし楽天は昭和二十年前後から少くともインテリの間にはふたたび影をひそめた。伊東の詩が再認識され出したのは当然のことである。なに巷には楽天家が多いといふか。楽天の基盤は何か。無教育か、体質か。いやこんなことを論ずるのは主題ではなかつた。少くとも伊東は厭世とはいはないまでも、楽天家ではなかつた。そしてその作品には烈しい色調で世情に反撥し、批判し、慷慨してゐる。わたしなどは、ときどき親ゆづりの楽天が出、作品でも交友でも伊東に叱られることが多かつた。いまごろになつても、この伊東の眼をときどき思ひ出す。そして昨年末には詩人廃業を宣言した。かうなつてはもう伊東に負ふこともない。楽々とこの文章が書ける、といつたら伊東はまだ、「それがあんなの悪いくせですよ」と叱るかしら。

私は強ひられる、この目が見る野や
雲や林間に
昔の私の恋人を歩ますることを

そして死んだ父よ、空中の何処で
噴き上げられる泉の水は
区別された一滴になるのか
私と一緒に眺めよ
孤高な思索を私に伝へた人！
草食動物がするかの楽しさうな食事を

「私は強ひられる——」

処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」の中でもまた初期の詩を例にあげよう。これは当時の詩壇でも異質であつたし、いまの詩にも比類を見ない。晦渋であるといへばいへるが、なんと多くを考へさせることか。これこそ詩なのだ。これこそ詩術——詩作法(アルス・ポエティカ)なのだ。読者はまづ「私は強ひられる」といふ句につき当る。この受身の語は国語に用ひられることが少ないのだ。われわれが「驚く」といふ時に、イギリス人、ドイツ人が「おどろかさされる」といふ語しかもたないのに、外国語を習つてまでおどろかさされる。しかもこの受身で出て来た句は、つひにおどろかさず主体を示さない。これに安心したとしても、「この目が見る」といふ主体性の強い語に、ふたたびつき当る。日本語ではかういふ時は「見える」といふ言語觀念が当てはまるのだからである。「昔の私の恋人」の語も日本語としては、稀ないひ方である。「私の昔の恋人」ないし「昔の恋人」なのである。伊東の愛したヘルデルリンの直訳調か。いな彼の計算の結果なのである。「語ひとを驚かさずんば」といつた杜甫と同じ計算を、この詩に徹した詩人は、ちやんと行つてゐるのである。

たちまち登場人物がかはる。聯想ではなくつて、恋人の次に現はれるのは死んだ父である。生きて、「裏切つた」——と考へてくれとい

ひたげな詩人の計算——恋人のあと、突如として現はれる父は、「孤高な思索を」伝へた人である。この遺産に詩人としての最大の幸福と同じ生活人としての最大の不幸がある。伊東がその人であつたかいかわたしは知らない。桑原氏などによれば伊東は学校の教師としても有能だつたといふのである。教師としての有能とは何か。生徒の敬愛を獲得することか。教員会議で黙ることか、雄弁をふるふことか——わたしにはわからない。閑語休題、またも受身、「噴き上げられる泉の水」「区別された一滴」——科学的にはこの方が正しいとしても、われわれは噴き上る泉の水と考へ、わかれる滴——とび散る滴として考へ、發言するにならされてゐるものを、伊東はまたかやうに計算する。そして諸者の湧き出る想像の中で、泉のありかも、滴そのものもエキゾチックな美しさを自然ともつやうになる。この風景に最後に出

現する草食動物もかくて、われわれの牛、われわれの馬、羊ではなくなる。こゝに草食動物といふ一般的な名詞を使用したのも、伊東の賢い計算だ。おかげで楽しい食事をするのは、牛、馬、羊……ではなくて、われわれは田のあぜで中食する農民を聯想し、もしくはピクニックに出た中小市民の親子を聯想することを妨げられない。「いろいろのこと思ひ出す桜かな」の句は駄句だが、いろいろのことを思ひ出させるところに、芸術のよさがあり、万人に愛される可能性がある。伊東の詩の正しい解釈はわたしのよくするところではない。しかしわたしさえも伊東の詩の一解釈者とはなり得る。

伊東はそれらの諸解釈のなかで、「さうでせうが、さういふだらうと思つてましたよ」と生前と同じく、意地のわるい笑ひ方をしてしかも喜ぶことと思ふ。

奈良便

前川佐美雄

○十一月上京したをり、亀井勝一郎氏に会つたら、会津(八二)さんは今日あたり危いのぢやないかな、との話であつた。私は忙しくあつちこつちと駆け廻つてゐたので、新聞も見ずラジオも聴いてゐなかつたので、さういふ消息については全くうかつたのだ。帰りの車中は偶然乗って来た西垣脩君(西垣君は明治大学に教鞭を執つてゐるが、両親の金婚式のため五、六年ぶりで大阪へ家族づれで帰るのだと言つて、奥さんやお子さんを同伴してゐた)と話してゐた為、京都でおりに夕刊を見るまで会津さんの死は知らなかつたのだ。

○会津さんは特に奈良と関係の深い人であることは周知の通りだ。その歌集「鹿鳴集」は大方が奈良の歌で占められてをり、奈良の歌と言へば会津さん、会津さんと言へば奈良の歌といふくらいになつてゐる。現在奈良には東大寺、新薬師寺、唐招提寺と、それから萬葉植物園とに都合四基の歌碑があり、その他会津さんの書き遺されたものは各所にあり、個人蔵のものもなかなか多い。奈良で、東大寺観音院のお客さんとなられるか、旅館日吉館に泊られるかのいづれかであつたが、晩年は久しく遠ざかつてをられたやうである。

○小泉三三さんの死も急であつた。血圧が高く、用心されてゐることは知つてをつたが、それだから関西歌人懇話会の出発に當つても遠慮してお誘ひしなかつたのである。すると是非会員になりたい、加へてくれといふ端書をよこされた。もちろん会員にはなつてもらふたけれど、やはり一度も例会に出席することなしになつてゐた。

○大阪、奈良、京都各歌会合同の嵯峨野吟行会は、十一月三日文化の日、天童寺から野の宮、常寂光寺、落柿舎、二尊院、清涼寺、大覚寺、広沢池、仁和寺、竜安寺、妙心寺の順に吟遊した。好季節の好日の故か案内参加者は少なかつたけれど、前川主宰夫妻一行約四十人、よい会であつた。

編輯後記

☆年頭には会員諸氏から沢山の賀状をいただき感謝申し上げます。こちらは勝手ながら新年号誌より御挨拶申上げておきましたが、失礼の段あしからず御了承願ひます。

☆新年号は昨年末おし迫つて発送致しましたが、全通ストのあふりやら、また賀状など郵便物輻輳の折柄とて、かなり延着した向きもあつたやうです。中には誤配か紛失か事情は分りませぬが、届かなかつた人もありました。若しも未だ入手されてゐない場合はお知らせ下さい。すぐに御送本申上げます。

☆百五十号記念合唱歌集の案内状もたいへん延着したやうです。これは全通ストのまつ最中であつた故か、奈良東京間でさへ旬日以上を要したのもありました。昨年末までに歌稿を集め、新年の比較的閑暇のをりに編輯部を動員して編纂を了したかつた予定が、すつかり狂ふことになりました。それに案内文に不備な所があり、近作を新作と考へ違ひをした人も多かつたやうです。最近二、三年間の近作の中から自選して欲しいとの意味だつたのです。こちらの不始末とおわび致します。☆かやうな事情から歌稿の集まりが遅く、未だにだらだらと送られて来る有様です。尤も編纂は日々に進捗して来ますが、なほ二月下旬まで締切を延期しますから、未送稿の人は至急に手続して下さい。これに参加せら

れない場合は、不熱心で協同の精神に欠ける誠意なき人といふことになりませう。三月中には是非刊行したいと思ひます。☆なほこの歌集の題名を広く会員諸氏から募集し、その中から恰好のものを選定したいと思ひます。すすんで応募下さい。これも締切は二月下旬までと致します。☆日本歌人十五人集「魚道」は、右の合著歌集や、山中智恵子歌集「空間格子」などと相前後して出ます。「魚道」の方は新たに作品を取り替へた人が多く、これの発行が大いに期待せられてをります。☆今月号及び来月号から若干の新人を同人に推薦することになりませう。最近の本誌は何かに頻りに新しい動きを感じられますが、まことに喜ばしいことと申さねばなりません。塗りかへられつつある日本歌人の新地図に注目してをります。☆歌会におきましても何か新しい動きが活潑です。月一回の歌会では満足出来ないから、更に研究会を持ちたいといふ声や、また前川佐美雄の面会日も定めて欲しいとの希望などです。よつてともに考慮されることになつてをります。☆いづれにしましても、会員の中から盛り上つて来る力は一番強いものです。これは尊重されなければなりません。本誌は戦後ずぶぶんふらふら致しましたが、もうさういふことはありますまい。新たな心をもつて一段と努力することにしたいのです。終りに歌稿の締切日の厳守をお願い致します。

規約抄

・日本歌人は前川佐美雄が主宰する。・日本歌人は会員と同人と維持同人とから成り、会員は一ヶ月八十円、(誌代六十円を含む)同人は一ヶ月二百円、それぞれ六ヶ月以上を前納するものとする。維持同人は内規による。学生及び療養者は一ヶ月五十四円の割合とする。・投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十文字以内で楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。添削は十首まで二百円。但し返信用切手封皮同封のこと。・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと。原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十円送料四十八円、発売所(京都市下京区仏光寺御幸町西入有限会社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)発行所では取り次ぎはしない。

日本歌人 (毎月一回二十日発行) 定価六十円・送料四円

昭和三十三年二月十五日印刷 昭和三十三年二月二十日発行 發行所 奈良市坊屋敷町四一番地 日本歌人發行所 振替大阪四七二八七番